

SOO GOODな一日をみんなですごそう 子どもフェスタ



【上段・午前の部】① テーマ考案者の橋元 奈々さん（恒吉小） ② 青少年海外派遣『シアトル』事業発表
③ チャレンジ・ザ・日本一『富士登山』事業発表 ④ 司会進行を務めたリーダー研修生

【下段・午後の部（わくわく体験コーナー）】⑤ バルーンアートコーナー ⑥ ホバークラフト体験コーナー
⑦ ペットボトル工作コーナー ⑧ しめ縄づくりコーナー

曾於市の子どもの祭典「第12回曾於市子どもフェスタ」が10月21日（青少年育成の日）に、末吉総合センターで開催されました。子どもフェスタは、子どもたちの健全育成の根底にある「人と人とのふれあい」を通して「人を思いやる心」「互いに協力し合う心」を育て、人間関係の強い絆の結びつきをめざして開催されています。

今年のテーマは「SOO GOODな一日をみんなですごそう子どもフェスタ」。

当日は、午前中に少年の主張大会、大隅弥五郎太鼓ジュニアの演奏、各青少年事業の体験発表が行われ、午後からは、合計16の体験ブースで「わくわく体験コーナー」が開かれました。参加した約500人の子どもたちは、それぞれ楽しい時間を過ごしていました。

子どもたちの笑顔は、曾於市の大切な宝物です。そんな笑顔が輝く素敵な一日となりました。

次のページからは
子どもフェスタで行われた
「少年の主張大会」の結果と
最優秀賞作品を掲載！



少年の主張大会

市内の小中学校の代表10人が出場し、学校や家庭、地域での経験や将来の夢などについて堂々と発表しました。

少年の主張大会 各賞一覧（敬称略）

【小学生の部】

最優秀賞

「仲間とともに」

中村 琴美（財部南小6年）

優秀賞

「大きな感謝と一つの目標」

甲斐 日珂梨（笠木小5年）

優良賞

「仲間の力は大きい」

坂下 結唯（柳迫小6年）

「ぼくの思い」

肥田木 公晴（大隅南小5年）

「ぼくは、変わる」

平田 洸雅（岩川小5年）

「声優になりたい」

平田 乃彩（財部小6年）

「争いのない世の中を目指して」

末廣 眞理那（末吉小6年）

【中学生の部】

最優秀賞

「目標に向かって走り続けた三年間」

市瀬 実夢（大隅中3年）

優秀賞

「人と関わることの大切さ」

今川 拓真（財部中3年）

「天職」との出会い」

和田 眞里奈（末吉中3年）

◎小学生の部【最優秀賞】

「仲間とともに」

財部南小学校 六年 中村 琴美



活最後の年に今しかできない何かに挑戦したい。」という強い思いが私の背中を押してくれた。

出発が近づくにつれ、私の心の中は二つの思いがどんどんふくらんでいった。一つは不安。もう一つは期待だ。その緊張を和らげてくれたのは家族や友達の声援だった。みんなと話をするたびに心が前向きになっていった。

いよいよ山頂への出発の時。「事前研修の高千穂でさえ大変だったのに、はるかに高い富士山に登ることができるのだろうか。」という不安と、「仲間を信じ十六人みんなで絶対に登り切ってみせる。」という期待を胸に、真夜中一時、私たちは八合目を後にした。

さすがにきつかった。言葉では言い表せない。まず、おそわれたはき気。数メートル歩くと道のはしに止まり、おとししてしまう。その時、近くの仲間が必ず声をかけてくれた。気持ちがあがうつと楽になる。頭痛とはき気でつらそうな仲間もいる。私も、その子に「深呼吸、深呼吸」と声をかける。

すると、彼女もほほ笑む。いくつ目かの山小屋でガイドさんが、「ここが最後の山小屋。後にはひけません。」とおっしゃった。その時、はき気もひどく、ここでリタイアしようかとあきらめかけた。でも、周りを見ると、五合目から頭痛を訴えていた仲間が登ると言った。私の心もやつと決まった。歩き出したのもつかの間、すぐに不安におそわれた。登っても登っても道は続いている。大きな段差やすべりそうな岩場を何度も何度もこえなければ進めない。さらに、上に行くほど酸素が薄くなり、ただただ息苦しい。さらに、前にも後ろにも長い行列で、自分のペースでは歩けない。しかし、下りたくても下りようがないと自分をはげまし、ただひたすら前へ前へ進んだ。

山頂に着いた時、私たちは自然とハイタッチ。たえあった。本当に本当にうれしかった。仲間がいたからここまで来れた。一人ならあきらめていたかもしれない苦しさも、仲間という存在で打ち勝つことができたのだ。

これからの私の未来、何度も何度もこえられないかべに出会えよう。その時は、自分に言い聞かせたい。「思い出そう。あの景色。あの仲間を。私はあきらめない。きつとやれる。」



◎中学生の部【最優秀賞】

「目標に向かって走り続けた三年間」

大隅中学校 三年市瀬 実夢



思い切り打った打球は、レフトへ高々と上がりキャッチされてアウト。これが私の最後の打席だった。結果は、一対十のワールド負け。まさかこんなところで負けるなんて予想もしなかった。「本当に負けたんだっけ」と受け止めきれなかった。家に帰ってから、やっと実感したせいか、涙がとまらなかった。でも、どこかほっとした気持ちだった。

中学校のソフト部の試合に、初めて出場したのは、入学前だった。周りにいるどの先輩も上手で、驚くぐ

らいに優勝をした。「ここでやっていくんだ。」と期待がふくらんだ。強いだけあって、練習量が多く、土日は一日練習だった。「頑張ろう」と思っていたが、心のどこかで、「なんでもなんにやるんだろう」という気持ちがあった。

ある時、練習中にキャプテンが地面に「九州制覇」と書いていた。それを見て、「先輩の夢をこわしちゃいけない」と思った。それから、きつくても目標があったから頑張れた。しかし、願いは届かず県三位で終わった。三年生が大粒の涙を流しているのを見ると、悔しかった。「来年は、先輩たちの分まで頑張ろう」と心の底から思った。

二年生になって、いざやるぞとなると大変だった。人数が足りずになかなか思うようにいかなかった。「やっとそろった。」と思ったときはもう四月。でもソフトができることへの感謝を改めて感じた。七月まで一生懸命やってきたけど、どうしても勝ちきれなかった。

あつという間の二年間を過ごすうちに、私は三年生になった。キャプ

テンを任せられ、十番の背番号をもらい、身が引き締まる思いだった。「今年こそは九州制覇をしてみせる」そう思った。

初めは、私は指示を出す陰で「えー。めんどくさい」と嫌な顔をされてとてもつらかった。だから私は、きらわれたくなくて

「何をする？」

とみんなに選択を頼って好かれようとした。でも、目標を改めて考えたときに「九州制覇」は仲良くソフトを楽しむだけじゃつかめないものだ。そして、私は、この時から嫌われてもいいから勝利をつかんで「ソフトをやってよかった」と、全員に思ってもらえるチームを作れるキャプテンを目指した。

試合で負けて泣いたり、自分たちよりも上手いところに勝って喜んだり、毎日がとても充実していた。時には、だらだらとした空気があったら、集合してしかることもあった。そんな日々はほんとに一瞬で、気づいたときは、もう七月だった。三年生は最後ということもあり、だんだんと焦りが出て、いらだっていることも

あった。それが後輩にも伝わり、練習にも熱が入った。

そして迎えた最後の大会。「自信をもって全力でプレーしましょう」

私が最後にかけて言葉だった。「はい」

今までで一番気持ちの入った返事をしてくれた。一人一人が全力でプレーしてくれた。しかし、昨年と同様ベスト3にも入れなかった。お互いにあいさつをした後に、喜んでいる相手を見るのはとてもつらかった。でもそれ以上に、全員が涙を流しているのを見ると、すごくうれしかった。「全力でやってくれたんだ」と思った。私のソフト生活は、先輩の目標と共に始まった。今までで一番嬉しかったこと、つらかったことも全てソフトの思い出だ。三年生でキャプテンをできたことは、ついてきてくれるみんながいたからだと思う。自分自身も成長できた。こうして、自分を熱中させてくれるものに出会えて本当によかった。目標に向かって走り続けた三年間は、一生の宝物だ。

